

日中接触場面における「ほめ」 —中国人日本語学習者の「ほめ」の言語行動と言語問題を中心に—

Compliments in Japanese-Chinese contact situation: Focusing on compliment of acts and language problems of Chinese-Japanese learners

袁 帥 (千葉大学, 人文社会科学研究科)

Shuai YUAN(Chiba University,
Graduate School of Social Sciences and Humanities)

Abstract

The focus of this paper is to examine the compliment activity in Japanese-Chinese contact situations. Especially, it is aimed to find out how Chinese-Japanese learner makes compliments, and examine how Japanese native speakers explain and evaluate those compliment utterers. By using the conversation date and follow-up interview date of 12 pairs' cooperators, the factors of the misunderstandings and the negative evaluation will be discussed.

The results show that some misunderstandings may occur in the compliment activity, because the Japanese native speakers and Chinese-Japanese learners apply the different language norms and culture norms. One of the reasons for the negative evaluations, which the Japanese native speakers gave to the Chinese-Japanese learners, is that Japanese native speakers want to hold the host role in the contact situation. Another reason is whether the compliment utterers made an improvement in the communication or not.

1. はじめに

我々は言うまでもなく日常生活の中で、人間関係を構築したり、維持したりするために、さまざまな言語行動(ほめ、依頼、断り、謝罪、感謝、誘いなど)を行っている。中でも相手をほめるという行為は、言語を問わず対人関係に直接関わる言語行動として、対人コミュニケーションに重要な機能を果たしているといえる。日本語の「ほめ」も同様で、ほめ方やその「ほめ」に対する相手の受取り方は日本語のコミュニケーションにおいても重要な要素となっている。特に、日本語の社会言語能力が十分ではない日本語学習者が日本人とのコミュニケーションの中で、「ほめ」の発話が求められる場面で「ほめ」の発話を表出しなかったり、「ほめ」の意図ではなかった発話を「ほめ」と判断して適切な応答ができず、相手に誤解されることも少なくない。川口他(1996)によると、日本語学習者は、日本人にほめられた時に「ほめられるほどではない」と感じ、それに対してどのように反応していいのかわからない。また、日本語学習者が先生の授業の進め方をほめ、先生に悪印象を与えてしまうなどの経験から、日本人は「ほめ」に対して否定的な反応をするのが一般的だという思い込みがあるという。

本稿では、中国人日本語学習者と日本人母語話者が参加する接触場面において、学習者側はどのような意図でどのように「ほめ」の言語行動を行っているのか、また学習者の「ほめ」は

日本人にどのように受け止められ、評価されるのかを検討する。これらを明らかにすることによって、日本語学習者の「ほめ」の言語行動に見られるコミュニケーション問題を考察する。

2. 先行研究

「ほめ」の表現形式を考察した熊取谷(1989)は、評価語類には特定対象物と結びつきやすいものと一般的なものとがあり、使用される表現形式の種類(O+V;V+O;O+好み)が極めて限定されているという結果を報告している。

また「ほめ」の対象に関する研究では、まず「ほめ」の対象を「所持物・外見」、「技量・性格」の二つに大別した丸山(1996)の研究がある。また、大野(2003)は「ほめ」の対象を「外見」、「持物」、「才能」、「性格・行動」、「人」、「作品」、「家族」に分類し、同等の親しい関係における「性格」、「作品」に対する「ほめ」が多いと指摘している。古川(2003)は「ほめ」の対象を「容姿」、「性格・属性」、「能力」、「行動・態度」、「関係ある人」、「服装・装飾」、「作品」に分類し、さらにほめる対象として、「行動」、「態度」が多いことを報告した。

小玉(1996)は対談インタビュー記事のデータを分析し、「ほめ」の全体的レベルとローカルのレベルの機能を考察した。それについて小玉(1996)は、「(ほめは)ホストとゲストの連帯感を強めるとともに、ホスト自身の会話への積極的な参加の提示とゲストの参加をさらに促進する機能を持っている。またそれは話題の転換など会話の構成に貢献し、FTA と連帯感の強化という、相反する機能の間にバランスが見受けられた」と記述している。

このように、日本語の「ほめ」をめぐる数多くの研究が行われてきたが、以下のような問題点が挙げられる。まず、「ほめ」を対象とした研究の大部分は、「ほめ」の表現形式の記述、ストラテジーの羅列、機能のラベルづけにとどまっている。そのため、「ほめ」という言語行動が自然の会話場面でどのように会話の参加者双方によって持ち込まれ、解釈され、評価されるか、また会話の参加者はこのような解釈や評価に基づいてどのように会話をさらに展開していくかという相互行為まではあまり論じられていない。次に、これまでの「ほめ」の研究では、ひたすらほめる側(以下、「ほめ」の送り手とする)に焦点が置かれ、ほめられる側(以下、「ほめ」の受け手とする)は注目されてこなかった。「ほめ」のような人間関係とかかわる言語行動を論じるには、会話参加者双方の行動を検討する必要がある。

また、「ほめ」をめぐる、母語場面の対照研究は数多くも見られるものの、接触場面の自然会話データを用いて「ほめ」を考察した研究はほとんどない。本研究が最終的な目的としている日本語教育への提言をすることを考えると、日本語学習者が実際にどのような言語使用をしているか、どのようなコミュニケーション問題を抱えているかを見なければならない。

そこで、本研究では、日中接触場面に参加する日本語学習者が行う「ほめ」の言語行動に注目する。具体的に日本語学習者の「ほめ」の意図と表現形式、及びそれに対する母語話者の解釈と評価を分析する。

3. 調査の概要

本調査は2007年7月から2011年8月にかけて行ったもので、ICレコーダを使い接触場面の会話2名1組計12組の会話を収録した。具体的に、中国人留学生に各自、同性の日本人の友人を一人連れてくるように依頼し、関東にある某大学(あるいは大学院)に在籍する中国籍の留学生(C)12名と留学生のそれぞれの日本人友人(J)12名の協力を得た。留学生からの依頼に応じた

日本人友人も同じ某大学(あるいは大学院)に在籍する学生である。

中国人日本語学習者の日本語学習歴は、来日前から学習を始めた場合と、来日後に始めた場合とがある。日本語能力試験の合格級、所属大学で受講している日本語コースのレベルなどの情報から、中国人日本語学習者は全員上級日本語学習者であることが分かった。

会話の収録の際は、「ほめ」の調査であることは告げず、会話の内容も限定せずに20分程度自由会話をしてもらうように依頼した。会話収録後、録音の内容は文字化し、一週間以内にフォローアップ・インタビュー(ファン2002, 以下, FUI)を行った。

表 1: 調査協力者のプロフィール

ペア番号	参加者	性別	身分	日本語学習歴(日本滞在歴)
ペア 1	C1	女	短期留学生	3 年 10 ヶ月(10 ヶ月)
	J1	女	学部生	—
ペア 2	C2	女	修士課程	2 年 1 ヶ月(2 年 1 ヶ月)
	J2	女	修士課程	—
ペア 3	C3	女	博士課程	8 年 5 ヶ月(1 年 5 ヶ月)
	J3	女	博士課程	—
ペア 4	C4	男	博士課程	3 年 6 ヶ月(6 ヶ月)
	J4	男	学部生	—
ペア 5	C5	男	学部生	2 年 7 ヶ月(2 年 7 ヶ月)
	J5	男	学部生	—
ペア 6	C6	女	短期留学生	2 年 9 ヶ月(9 ヶ月)
	J6	女	学部生	—
ペア 7	C7	男	学部生	5 年 2 ヶ月(5 年 2 ヶ月)
	J7	男	学部生	—
ペア 8	C8	男	学部生	8 年 9 ヶ月(2 年 9 ヶ月)
	J8	男	学部生	—
ペア 9	C9	女	修士課程	4 年 9 ヶ月(9 ヶ月)
	J9	女	学部生	—
ペア 10	C10	男	博士課程	14 年 3 ヶ月(14 年 3 ヶ月)
	J10	男	博士課程	—
ペア 11	C11	女	修士課程	5 年 5 ヶ月(3 年 5 ヶ月)
	J11	女	修士課程	—
ペア 12	C12	男	修士課程	5 年 3 ヶ月(1 年 3 ヶ月)
	J12	男	学部生	—

4. 分析の方法

4.1 「ほめ」の発話の認定と抽出

「ほめ」の定義について、小玉(1996)は Holmes(1988)に基づき、「ほめるという言語行為は、話し手が聞き手あるいは聞き手の家族やそれに類する者に関して“よい”と認める様々なものあ

るいはことに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、明示的にあるいは暗示的に、肯定的な評価を与える行為である」と述べている。「明示的」あるいは「暗示的」という「ほめ」の方法に関して、先行研究での意見は統一されていないが、その見分け方としては「肯定的評価語の使用があるかどうか」という点で意見が一致している。本研究では、小玉(1996)の定義に沿い、「ほめ」とは、話し手が聞き手あるいは聞き手の家族やそれに類する者に関して“よい”と認める様々なものあるいはことに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、明示的にあるいは暗示的に、肯定的な評価を与える行為」と定義する。そして本研究では、各ペアの会話に現れた会話の相手あるいは相手に関連する人物や物事に対しよいと認め、それを明示的にあるいは暗示的に示す発話の箇所を「ほめ」として抽出した。

また、「ほめ」の定義においては、「ほめ」は会話の聞き手を気持ちよくさせることを前提としている点から、「ほめ」は一つの発話の最終目的であるだけではなく、「ほめ」を他の言語行為を果たすための一種の手段として使用するところも注目されてきた。したがって、「ほめ」を定義付ける上では、「明示的」と「暗示的」というほめ方に対する分類の他に、「ほめ」を行う意図から「ほめ」を分類する視点も必要であると考えられる。

川口他(1996)は、下記のように何の表現意図をもってほめる行為を行うのかという視点で、「ほめ」を「実質ほめ」と「形式ほめ」に分類している。

「実質ほめ」：相手自身、相手に関するものごとなどについて心から高い評価を表現したい時のものである。

「形式ほめ」：ほめること自体に表現の意図はなく、別の表現意図のために行う「ほめ」である。

(川口他 1996 より)

以上のような「ほめ」の定義付けに従い、本研究では、「ほめ」を以下の表 2 のように四つのタイプに分けて認定および抽出した。

表 2: 本研究における「ほめ」の認定と抽出

「ほめ」の種類 「ほめ」の方法	「ほめ」の意図あり (実質ほめ)	「ほめ」の意図なし (形式ほめ)
肯定的評価語あり (明示的ほめ)	明示的/実質ほめ(I)	明示的/形式ほめ(III)
肯定的評価語なし (暗示的ほめ)	暗示的/実質ほめ(II)	暗示的/形式ほめ(IV)

表 2 が示している通り、本研究で扱う「ほめ」は意図あり、肯定的評価語ありの「明示的/実質ほめ」、意図あり、肯定的評価語なしの「暗示的/実質ほめ」、意図なし、肯定的評価語ありの「明示的/形式ほめ」と意図なし、肯定的評価語なしの「暗示的/形式ほめ」の 4 タイプとする。

以上のような方法で、調査で収録した 12 組の接触場面の会話から合計 44 の「ほめ」の談話が収集された。表 3 は各ペアの中で中国人日本語学習者(C)と日本語母語話者(J)それぞれによる

「ほめ」の数を集計したものである。

表 3: 各ペアの「ほめ」の出現数

	ペア 1	ペア 2	ペア 3	ペア 4	ペア 5	ペア 6	ペア 7	ペア 8	ペア 9	ペア 10	ペア 11	ペア 12	合 計
C	0	1	1	4	2	0	1	1	1	3	1	4	19
J	1	1	4	3	1	2	0	2	3	0	2	6	25
合 計	1	2	5	7	3	2	1	3	4	3	3	10	44

また、中国人日本語学習者による 19 例の「ほめ」を、「実質/形式ほめ」と「明示的/暗示的ほめ」に分類した結果を示したものが以下の表 4 である。

表 4: 中国人日本語学習者による「ほめ」の分類

分類	発話番号	合計
明示的/実質ほめ	2-2 4-1 4-3 4-5 4-7 5-1 10-1 10-2 12-1 12-4 12-5	計 11 例
暗示的/実質ほめ	3-3 5-3 8-2 10-3 11-3	計 5 例
明示的/形式ほめ	7-1 9-3 12-9	計 3 例
暗示的/形式ほめ	—	計 0 例
合計	計 19 例	

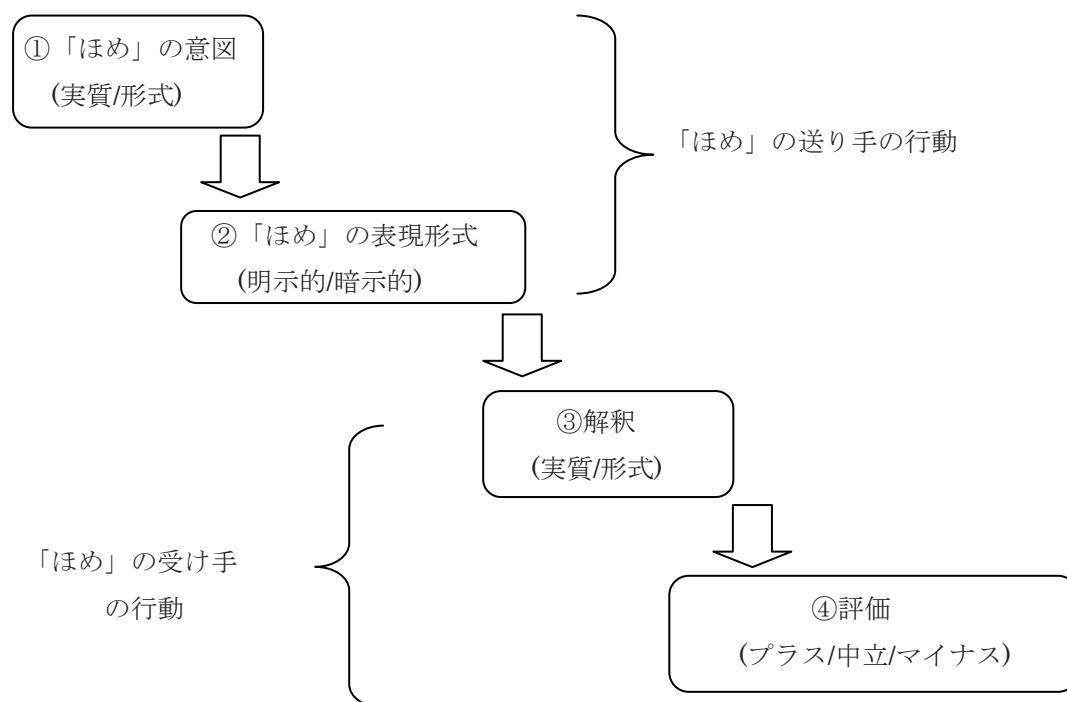
表 4 からわかるように、中国人日本語学習者による 19 例の「ほめ」のうち、「明示的/実質ほめ」が 11 例と最も多く、次に「暗示的/実質ほめ」が 5 例、そして、「明示的/形式ほめ」が 3 例と最も少なかった。この結果から、中国人日本語学習者が「ほめ」を行う際、「肯定的評価語」を多用する傾向があることがわかる。本稿では、このような中国人日本語学習者が行った「ほめ」は日本語母語話者にどのように受け取られるかを考察し、日中接触場面における中国人日本語学習者の言語問題を探る。

4.2 分析の枠組み

「ほめ」の相互行為を分析するには、「ほめ」の送り手の行動と「ほめ」の受け手の行動を両方から見る必要があると考える。「ほめ」の送り手の行動には、「ほめ」の意図と「ほめ」を行う際使用する表現形式などがあり、また「ほめ」の受け手の行動には、向けられてきた「ほめ」をどのように解釈し、どのように評価するかという行動が含まれていると考える。

以下の図 1 は、本稿で「ほめ」の相互行為を分析する際の分析項目を示したものである。

図 1:「ほめ」をめぐる相互行為の構成要素



上記の構図が示した四つの分析項目に従い、本研究では、まず会話の中で現れた「ほめ」の発話はどのような意図のもとで発せられ、どのような表現形式の特徴が見られるかを分析する。そのうえ、それぞれの「ほめ」の発話に対し、参加者同士がどのように解釈し、評価するかを検討する。

5. 調査結果と分析

本節では、本調査で収集した中国人日本語学習者による 19 例の「ほめ」を分析する。具体的には、まず、中国人日本語学習者が行った「明示的/実質ほめ」、「暗示的/実質ほめ」、「明示的/形式ほめ」を、それぞれ「ほめ」の対象や表現形式の観点から分析する。そして、日本語母語話者の解釈と評価の結果を分析する。

5.1 「明示的/実質ほめ」に見られる「ほめ」の対象と表現形式

中国人日本語学習者が行った 19 例の「ほめ」のうち、「明示的/実質ほめ」が 11 例と最も多い。これらの「ほめ」の対象を分析したところ、相手の「能力」(7 例)、「行動」(3 例)、「集団」などの「ほめ」の対象が観察された。また、表現形式に関しては、11 例の「明示的/実質ほめ」のうち、10 例が「肯定的評価語のみ」で行われたことが分かった。残りの 1 例は「肯定的評価語＋理由づけ」となっている。一方、中国人日本語学習者による「明示的/実質ほめ」に対する相手の日本語母語話者の解釈と評価については、日本語母語話者に「実質ほめ」として解釈されたものが 7 例あり、そのうち 5 例がプラス評価され、1 例が中立評価され、1 例がマイナス評価された。また、日本語母語話者に「形式ほめ」として解釈されたものは 4 例で、そのうち 3

例が中立評価され、1 例がマイナス評価された。

中国人日本語学習者による「明示的/実質ほめ」の詳細と日本語母語話者の解釈と評価の詳細は以下の表 5 の通りである。

表 5:「明示的/実質ほめ」の詳細

中国人日本語学習者による「明示的/実質ほめ」の詳細				日本語母語話者の 解釈と評価	
番号	該当発話	対象	表現形式	解釈	評価
4-3	素晴らしい問題ですよ	能力	評価語のみ	実質	プラス
4-7	中国語が素晴らしいだし	能力	評価語のみ	実質	プラス
5-1	いいな(1.5)人生のプランいいな	行動	評価語のみ	実質	プラス
10-1	そうですね。そうですと、そう なると、うん(1.5)なんか上 品なイメージしますね	能力	評価語のみ	実質	プラス
12-4	えーすごい、なんかいろいろ な曲があって(そう)すごいな	集団	評価語 +理由付け	実質	プラス
12-5	すごいな	能力	評価語のみ	実質	中立
4-1	すごいですよ	能力	評価語のみ	実質	マイナス
2-2	えらいですね	行動	評価語のみ	形式	中立
12-1	すごいですよね	行動	評価語のみ	形式	中立
10-2	はい、それいいですね	能力	評価語のみ	形式	中立
4-5	この人は、でもすごいですよ、 その	能力	評価語のみ	形式	マイナス

5.2 「暗示的実質ほめ」に見られる「ほめ」の対象と表現形式

中国人日本語学習者による「暗示的/実質ほめ」が計 5 例観察された。「ほめ」の対象に関しては、「持ち物・外見」が 2 例、「性格・態度」、「行動」、「能力」がそれぞれ 1 例である。表現形式に関しては、「間投詞」による「ほめ」が 3 例あり、「コメント」、「相手の反応の否定」による「ほめ」がそれぞれ 1 例あった。日本語母語話者の解釈と評価を見ると、中国人日本語学習者による「暗示的/実質ほめ」が「実質ほめ」として解釈されたのは 2 例であり、そしてこの 2 例は中立的に評価された。また、「形式ほめ」として解釈されたのは 3 例であり、そのうち 2 例は中立的に評価され、1 例はマイナス評価された。この結果を以下の表 6 にまとめる。

表 6:「暗示的/実質ほめ」の詳細

中国人日本語学習者による「暗示的/実質ほめ」の詳細				日本語母語話者の 解釈と評価	
番号	該当発話	対象	表現形式	解釈	評価
8-2	J8 らしいよね	性格・ 態度	コメント	実質	中立
11-3	hhhh, 太ってないよ, 大丈夫	持ち物 ・外見	相手の反応の否 定	実質	中立
3-3	えー	持ち物 ・外見	間投詞	形式	中立
5-3	ほうー	行動	間投詞	形式	中立
10-3	おうー	能力	間投詞	形式	マイナス

5.3 「明示的形式ほめ」に見られる「ほめ」の対象と表現形式

最後に、中国人日本語学習者が行った 19 例の「ほめ」のうち、「明示的/形式ほめ」が 3 例観察された。「ほめ」の対象には、「国」、「能力」、「行動」がそれぞれ 1 例現れ、「ほめ」の表現形式には、「肯定的評価語＋理由づけ」、「肯定的評価語＋情報要求」、「肯定的評価語のみ」がそれぞれ 1 例ずつ対応してみられた。また、会話参加者の FUI の報告から、この 3 例の「明示的/形式ほめ」はそれぞれ「相づち」(2 例)、「冗談」(1 例)といった意図で行われたことがわかった。日本語母語話者の解釈と評価については、中国人日本語学習者による「明示的/形式ほめ」は 3 例とも「形式ほめ」として解釈された。そのうち、2 例がマイナス評価され、1 例が中立的に評価された。

以下の表 7 は、中国人日本語学習者による 3 例の「明示的/形式ほめ」の概要及び日本語母語話者の解釈と評価の結果を示したものである。

表 7:「明示的/形式ほめ」の詳細

中国人日本語学習者による「ほめ」の詳細				日本語母語話者の 解釈と評価	
番号	該当発話	対象	表現形式 (意図)	解釈	評価
7-1	あ一年は 2 回くらい, ふんー, 防災大国ですね	国	評価語 ＋理由付け (相づち)	形式	中立
9-3	よん, よく知ってるね, なん でそんなに知ってるの!?	能力	評価語 ＋情報要求 (冗談)	形式	マイナス
12-9	すごい!	行動	評価語のみ (相づち)	形式	マイナス

6. 考察

前節の分析でわかったように、中国人日本語学習者が行った 19 例の「ほめ」は、意図と解釈が一致した例もあるが、ずれが生じた例も 7 例見られた。また、中国人日本語学習者による「ほめ」は日本語母語話者にプラス評価される例もあるが、マイナス評価されてしまった例も 5 例観察された。これらの例は、統計的に大多数は示していないが、中国人日本語学習者による「ほめ」の意図が場合によっては相手に伝わらなかったり、マイナス評価されてしまうこともあることを示している。これらはさらに、中国人日本語学習者のコミュニケーション問題につながっている可能性が考えられる。

以下からは、中国人日本語学習者が行った「ほめ」の意図がなぜ日本語母語話者の解釈と食い違ったのか、その要因を考察する。特に、日本語母語話者がマイナス評価した「ほめ」について、どこにマイナス評価される原因があったのかを検討する。

6.1 「ほめ」の意図と解釈のずれが生じる要因

(1) 文化規範による意図と解釈のずれ

中国人日本語学習者が行った「ほめ」の意図と解釈のずれが生じた事例は、「明示的/実質的ほめ」と「暗示的/実質ほめ」の 2 種類の中で観察された。これは、中国人日本語学習者が行った「実質ほめ」が表現形式を問わず、日本語母語話者に「形式ほめ」として解釈されたしまう可能性があることを示している。このように、中国人日本語学習者が行った「ほめ」の意図と日本語母語話者の解釈のずれが生じた要因の一つとしては、中国人日本語学習者と日本語母語話者が異なる文化規範を持っていることが考えられる。

次の【例 1】では、C3 が J3 の着ているタイで買った服を見て、間投詞「えー」で「実質ほめ」を表しているのに対し、J3 がそれを「形式ほめ」と判断している。C3 は以前、J3 からタイの服が安価であるという話を聞いていた。そして、この例で実際に J3 が着ている服がタイのものだと聞き、日本の服と見た目があまり変わらないと感じた。C3 は、日本製の服が高品質であるという認識を持っていたが、タイ製の服も意外に品質が良いと思って J3 の服をほめたと FUI で説明した。一方、J3 は「タイに留学したことがあり、タイの服が安いけど、質的には日本と全然違う」という意識を持っており、「それほめ言葉だと思うけど、でも軽いほめかな、そこでやっぱぼろぼろねって言わないよね普通は」と FUI で報告している。

【例 1】 3-3 服装の話

- 1 J3 : たぶんねこれタイの服だよ
- 2 C3 : そう?
- 3 J3 : うん
- 4→C3 : えー
- 5 J3 : そあのう、いっぱい洗ってるからボロボロなっちゃったけど
- 6 C3 : 日本の服とあんまり変わらないね
- 7 J3 : やっぱね、こういうところが、ちょっとね h h h やばい
- 8 C3 : あ、そそそか h h h

J3 の報告から、J3 は C3 の「実質ほめ」を「形式ほめ」として解釈してしまった要因としては、J3 は「日本の服とタイの服が違う」という規範を持っていたのに対し、C3 は「日本の服とタイの服が同じ」という服と製造国に対する異なる社会文化規範を持っていたことが考えられる。

つまり、「ほめ」の送り手がどのような意図でほめても、そのほめられる内容が自分の持っている文化規範と合わない場合、「形式ほめ」として解釈される可能性があるということである。

(2) 言語使用規範による意図と解釈のずれ

意図と異なる解釈になる要因は、社会文化規範の違いの他に、中国人日本語学習者と日本母語話者それぞれの言語使用の規範が異なるという原因も考えられる。

次の会話【例 2】は、C2 が日本人の読書について質問し、それに対して J2 が自分の読書について話している場面である。この例では、C2 が「J2 が研究に熱心で、いつも本を読んでいること」と感心し、「本当に J2 をほめたい」という思いを発話 2 で話したのに対し、J2 はそれを「形式ほめ」と判断したことが 2 人の FUI の報告でわかった。J2 は FUI で「普通に相づちだと思った」と報告しており、また日本人はよく「えらいですね」「いいですね」のような形で「相づち」を打つとも話していることから、例 2 の C2 の「ほめ」に対しても、「実質ほめ」として解釈していないと判断できる。

【例 2】 2-2 読書の話

- 1 J2 : そういう本を読む時間のほうがはつきりって多い、ていうか、あのうそういう本は、あのう、おのずと自然と自分の研究テーマと結び付いているのが多くて、まあどっか足しになるんですよ考え方の、だから完全に別物じゃないかな、楽しんでやってる？今のうちは、研究テーマ、だから、日本は//
- 2→C2 : //えらいですね
- 3 J2 : でもち[よっ
- 4 C2 : [テー]マに関係する本[をちゃんと読んで]
- 5 J2 : [いや、無理やりに]関係させるっていう言い方の方がむしろ正しいかもしれない、それが自分が研究テーマ好きでやってるから、好きなものを人間自然と選んでしまうから、結局そういう本を手にするのかもしれない
- 6 C2 : かもしれない

日本語の「ほめ」に対し、林(2003)は、「あなたは素晴らしい」というような丸ごと対象をほめる「全体ほめ」と「あなたのこつこつと仕事している姿がすばらしい」のように部分を特定してほめる「部分ほめ」があるとし、「全体ほめ」は簡単であるが、乱発すると「手抜きほめ」の印象を与え内容が軽くなり、信用・信頼を損なうことになる」と指摘している。日本語では「全体ほめ」が「形式ほめ」の性格を持っており、日本語母語話者はこれを互いに了承しているのに対し、中国人日本語学習者側はこのような意識は持たず、「全体ほめ」でもメッセージの形が「ほめ」であれば、それを「実質ほめ」と認識する傾向がある。このように、それぞれの言語使用規範が異なるため、接触場面において「ほめ」の送り手の意図と「ほめ」の受け手の解釈

にズレが生じたのである。

6.2 中国人日本語学習者の「ほめ」がマイナス評価される要因

(1) 日本語母語話者のホスト役割の維持

中国人日本語学習者が行った「ほめ」は日本語母語話者にマイナス評価された例は、意図と解釈が一致している例も含め、「形式ほめ」として解釈された例が多い。なぜ意図と解釈が同じでもマイナス評価されてしまうのか、またなぜ「形式ほめ」として解釈された「ほめ」がマイナス評価されてしまうのか、その要因としてまず日本語母語話者のホスト役割の維持が考えられる。

以下の【例3】と【例4】は日本語母語話者にマイナス評価された例である。

【例3】は、日中近代関係史を専門として日本に留学しているC4が自分の研究内容に関することをJ4に説明している場面で現れた「ほめ」の談話である。

【例3】 4-5 研究の話

- 1 J4: 犬養毅, 5・15 事件か
- 2 C4: 5・15 事件です
- 3 J4: [違ったね]
- 4→C4: [この人は], でもすごいですよ, その
- 5 J4: いやいや, 名前しか出てこないんだから, それで

【例3】に入る前までの会話の流れでは、C4が歴史人物「犬養毅」について話し、J4が人物を別の歴史事件の人物と誤解をしながらC4の話を聞いていた。しかし、話が進んでいくうちに、「犬養毅」はJ4自身がそれまで想定していたこととは別の歴史事件の人物だと気づいた(発話3)。しかし、C4は「J4が歴史事件を間違っただとしても、その人物の名前を知っていること自体が珍しい」と発話4でJ4をほめている。これに対しJ4は、以下のFUIのコメントからもわかるように、この「ほめ」に強い反感を持っている。

「ほめ」の発話4に対するJ4のコメント: 「僕自身が間違っただけですよ、違ったから恥ずかしいよね、日本のことですよ、日本のことなのに、僕間違っただ、C4のほうが詳しい、しかも自分がずっと合っていると思って話を聞いていた、で、(正しいもの)出てきた、(自分間違っているのに)気づいた、もう言われたくない、なにがすごいのが分からないし、全然すごくない、全然うれしくない。」

このようなJ4の報告からは、「ほめ」の評価に日本語母語話者の文化ホストとしての役割が要因として関わっていることが考えられる。次の例4も日本語母語話者マイナス評価された「ほめ」の例である。

【例4】では、C9は夏休みに中国に帰る際、親族へのプレゼントに煙草を買おうと決め、煙草の値段をJ9に尋ねている。J9がすぐに煙草の値段を答えられたことに対し、C9が発話5で冗談を重ね、J9をほめている。C9は、中国ではたばこの種類が多く、値段もそれぞれ異なる、しかも女性は煙草を吸うことは普通ではないという自国の文化知識を持っている。それゆえ女

性である J9 がすぐに特定の銘柄の煙草の値段を答えられることが「ちょっと不思議だ」と感じ、J9 をほめている。しかし、これに対し J9 は「煙草の値段を知っているのは常識である」と考え、ほめられても困ると FUI で報告している。

【例 4】 9-3 プレゼントに煙草を買う話

- 1 C9 : (セブンスター)高いですか h h h
- 2 J9 : や、高くないよ//
- 3 C9 : //そっか//
- 4 J9 : //420 円くらい
- 5→C9 : よん、よく知ってるね、なんでそんなに知ってるの！？
- 6 J9 : だってスーパー売ってたから
- 7 C9 : h h h 400
- 8 J9 : 20 円くらい

「煙草の値段を知っている」ことに対し、C9 と J9 は各自の国の社会文化知識を背景とし、この事実を理解している。日本社会において「常識」であることが C9 からみると「不思議」なことである状況で、互いが自文化の規範で相手をほめてしまったため、コミュニケーション問題が生じている。

「ほめ」の発話 5 に対する J9 のコメント：「煙草の値段ってスーパー行ってすぐわかるじゃない、吸うかどうかは関係なく、普通誰でも知っていると思う。常識みたいな。それでほめられるのはちょっとどうかな」

【例 3】と【例 4】では、学習者が日本人なら誰でも知っている常識をほめていることが母語話者にマイナス評価されている。つまり、ここでは「自分が日本文化の一員で、日本についての知識が外国人よりも詳しいはず」という母語話者が持っている文化知識のホスト志向が相手の「ほめ」の評価に影響している可能性が推測される。このホストの役割が文化ゲストである中国人日本語学習者の「ほめ」により壊されると、その「ほめ」は「実質ほめ」であってもマイナス評価を招く事態に陥ってしまう可能性があると考えられる。

(2) コミュニケーションの遂行

次に、日本語母語話者は中国人日本語学習者が行った「ほめ」をマイナス評価してしまうもう一つの要因として「コミュニケーションの遂行」をあげ、説明を加える。

以下にペア 10 から収集した【例 5】と【例 6】を取り上げる。【例 5】は中立評価された例であり、【例 6】はマイナス評価されてしまった例である。

【例 5】 10-2 趣味の話

- 1 J10: 夏の体調と合うのかなとか(えー)というので、そういうワインを使えたり、
のはしましたね
- 2→C10: はい、それいいですね
- 3 J10: なんか h h いいですよ
- 4 C10: ちょっと
- 5 J10: そう、そういうのをみこして趣味じゃないけど、結果的にそういう風に使えた
というか
- 6 C10: えー、それいいですね
- 7 J10: そうですね、そー、そあとワインあたりじゃないけど、紅茶あたりだと(略)

【例 5】では J10 がワインとお茶を楽しむことが自分の趣味だと C10 に話している。そして、ワインを楽しむことはただの趣味ではなく、季節によって体調に合うワインを選ぶと健康にもいいと語っている。これに対し、C10 は発話 2 で J10 をほめている。しかし、J10 はこの「ほめ」の発話に使われている「いいですね」をただの「相づち」として捉えていることが J12 の FUI の報告で明らかになった。

この、「ほめ」を相づちとして受け止め、普通の会話の流れだと考えた事例は、会話をもう少し詳しく見てみると、ここでの J10 のワインに関する話が、この「ほめ」を境に終了しようとしていることがわかる。J10 はその後の発話 5 でワインをどのように利用しているかという話をさらに展開していくのではなく、自分のワインの趣味をまとめて発言しているように見える(発話 3 と発話 5)。これを聞いて、C10 は発話 6 でもう 1 度ほめようとしたが、結局発話 2 の「ほめ」の発話と同じような発話だけが現れたため、J10 は依然としてこの発話が自分の話に対する興味の表示であるとは考えず、ワインの話をやめ、紅茶の話に変えようとした(発話 7)。ここでは、C10 の「ほめ」が会話を促進する働きをしなかったのではないかと考えられる。

「ほめ」の発話 2 に対する J10 のコメント: 「何も考えていないけど、普通の相づちだから流したと思う」

そしてこの会話に続く【例 6】は、【例 5】と同じ、J10 が自分の趣味について語っている場面である。

【例 6】 10-3 飲酒の話

- 1 J10: そうですね、半分より飲むと、だか日本酒おいしいのがあったりすると(うん)
とか、家の人が僕が飲んでるのを見てて、半分より飲むとあこれはおいしいワインだとか日本酒だとかかわかったり
- 2→C10: おうー
- 3 J10: そういうのありますね
- 4 C10: はい、うちの K 先生結構飲むじゃないですか
- 5 J10: あそう

J10 は飲酒することで、酒の良し悪しを弁別するようになり、家族も J10 の意見を酒の質を判断する基準としている。C10 は「J10 は本当にお酒が飲める人だし、しかもただ飲めるだけではなく、J10 自身のものさしをもちちゃんと持っていること」に対し「ほめ」の発話 2 で感心を表している。しかし、この間投詞による「ほめ」については、J10 はそれが重みのない形式だけの「ほめ」だと捉え、自分の話していることに興味がないと理解してしまう。そのため、コミュニケーションは中断され、C10 の「ほめ」もマイナス評価される。

「ほめ」の発話 2 に対する J10 のコメント：「別にほめなくても、もし興味あればもっと突っ込んでくるじゃない、どういうお酒、何ですかとか、多分話受け止めなかったんですけど、自分が酒に興味あるので、自分で話せそうな分野は突っ込んでくれれば」「多分 C10 さん別の話したかったんじゃないかな」

「ほめ」の発話により、相手が持ち出した話題でも、自分自身が持ち出した話題でも、そのままさらに展開していくことを日本語母語話者は求めている。

日常的な雑談は、何かの行動を実現させるような目的を持っているのではなく、話のスムーズな展開それ自体がコミュニケーションの目的となっている。会話をスムーズに展開するため、話し手の話に対し興味を示し、その話をもう少し進めてほしいことを示す聞き手の役割を果たすことが望ましい。また、中国人日本語学習者として、「ほめ」のような言語行動の果たす機能は単に相手のポジティブ・フェイスを満たす手段として使うだけでなく、相手の話に対する興味表示のような会話の円滑な展開に貢献する会話上の機能も持っていることを認識しなければならない。「ほめ」のような言語行動が果たす会話上の機能を理解し、また「ほめ」を行う際のほめ方にもっと工夫をするようになれば、コミュニケーションの遂行が円滑に達成することが期待できるのである。

7. まとめと今後の課題

本稿は、中国人日本語学習者と日本語母語話者が参加する接触場面における「ほめ」の言語行動を考察してきた。具体的に、中国人日本語学習者は「ほめ」を行う際の意図と表現形式、それに日本語母語話者が「ほめ」を受ける際の解釈と評価を分析した。その結果、中国人日本語学習者が「実質ほめ」や「明示的ほめ」を多用する傾向があることがわかった。日本語母語話者の解釈と評価に関しては、中国人日本語学習者が「実質ほめ」の意図で行った「ほめ」は「実質ほめ」として解釈された例と「形式ほめ」として解釈された例、両方が見られ、「形式ほめ」の意図で行った「ほめ」は全て「形式ほめ」として解釈された。また中国人日本語学習者による「ほめ」は日本語母語話者にプラス評価と中立評価された例が大多数を占めているが、マイナス評価となった例も観察された。「ほめ」の意図と解釈のすれが生じる要因としては、中国人日本語学習者と日本語母語話者の文化規範や言語使用規範が異なる点が挙げられる。また「ほめ」がマイナス評価される要因については、本稿では日本語母語話者のホスト役割の維持とコミュニケーションの遂行の二つをあげて考察することができた。

このように接触場面において適切に「ほめ」を行うことができない場合、中国人日本語学習者は日本語母語話者に誤解されたり、マイナス評価されたりする傾向があることがわかった。適切に「ほめ」を行うために中国人日本語学習者は、接触場面における日本語の「ほめ」の仕

方や機能についての理解を深めなければならない。この理解を深めるには、日本語教育の現場において、日本語の「ほめ」の仕方や機能を学習者に知ってもらうだけではなく、本研究で取り上げたような母語話者の異なる解釈およびマイナス評価となった学習者の「ほめ」を学習者に気付かせることも重要だと言えよう。

本稿は限られた数のデータに見られる傾向を示したが、さらに量的なデータによる検証が必要だと考えられる。また、「ほめ」の言語行動に続く「ほめ」の応答の言語行動もほめる言語行動研究においては重要な要素である。今後は「ほめ」の応答の言語行動、すなわち「ほめ」の受け手はどのように「応答」をし、またその「応答」を受けた「ほめ」の送り手はそれをどのように解釈し評価するかという「ほめ」への「応答」の相互行為も考察しなければならない。

さらに、従来の母語場面の「ほめ」研究の大部分は相互行為までは分析対象としていないため、本稿で得られた結果が果たして接触場面の特徴であるのかについては疑問が残る。これについては今後さらに母語場面の研究を進め、母語場面と比較分析する中で検証していく必要があるだろう。

文字化の規則

記号	意味
,	1 秒以下のポーズ
(2)	1 秒以上のポーズ(カッコ内の数字はポーズの長さ)
?	上昇イントネーション
!	強い口調
—	長音
hhh	笑い(h の数は笑いの長さ)
発話 a[] 発話 b[]	発話 a と発話 b の重なる部分
//	割り込み
xxx	聞き取り不可能の箇所

参考文献

- Brown, P. and Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- フェアブラザー, リサ (2002). 相手言語接触場面における日本語母語話者の規範適用メカニズム 接触場面における言語管理プロセスについて 2 千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告 138 pp.1-12 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- ファン, S.K. (1998). 接触場面と言語管理 特別研究 日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成 会議要録 pp.1-16 国立国語研究所日本語教育センター
- ファン, S.K. (2002). 対象者の内省を調査する: フォローアップ・インタビュー J.V.ネウストプニー, 宮崎里司編 言語研究の方法 pp.87-95 くろしお出版
- ファン, S.K. (2006). 接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題 国立国語研究所(編) 日本語教育の新たな文脈—学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性—

pp.120-141 アルク

古川由理子 (2003). 書き言葉データにおける＜対者ほめ＞の特徴—対人関係から見た「ほめ」の分析— 日本語教育 117 pp.33-42

Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.

林伸一 (2003). 「ほめる・ほめられる」教育—ほめる対象, 方向, 範囲, 内容, 動機, 効果などの分類試案 ピアヘルピング講座実施報告書 pp.5-14

平田真美 (1999). ほめ言葉への返答 横浜国立大学留学生センター紀要 6 pp.38-47

Holmes, J. (1988). Paying compliments: A sex-preferential politeness strategy. *Journal of Pragmatics* 12 pp.445-465

川口義一, 蒲谷宏, 坂本恵 (1996). 待遇表現としてのほめ 日本語学 15-5 pp.13-22

金庚芬 (2005). 会話に見られる「ほめ」の対象に関する日韓対照研究 日本語教育 124 pp.13-22

金庚芬 (2008). 日本語と韓国語の「ほめ」の表現—日韓大学生の会話データを用いて 接続8 特集 言語と教育 pp.2-29

小玉安恵 (1996). 対談インタビューにおけるほめの機能(1)—会話者の役割とほめの談話における位置という観点から— 日本語学 15-5 pp.59-67 明治書院

小玉安恵 (1997). 対談インタビューにおけるほめの機能(2)—会話者の役割とほめの談話における位置という観点から— 日本語学 15-6 pp.84-92 明治書院

熊取谷哲夫 (1989). 日本語におけるほめの表現形式と談話構造 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究(二) pp.97-108 広島大学教育学部

丸山明代 (1996). 男と女とほめ—大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語的分析—日本語学 15-5 pp.68-80 明治書院

村岡英裕 (2006). 接触場面における問題の種類 村岡英裕(編) 接触場面の言語管理研究 3 社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 129 pp.103-116 千葉大学大学院社会文化科学研究科

ネウストプニー, J.V. (1994). 日本研究の方法—データ収集の段階 待兼山論叢 28 日本学篇 pp.1-24 大阪大学文学部

大野敬代 (2003). シナリオ談話における「形式ほめ」の特徴 日本語論叢 4号 日本語論叢の会

関崎博紀 (2010). 日本語の会話における否定的評価の表現を含む発話の機能—発話のきっかけに注目して 筑波大学地域研究 31 pp.45-63

田辺洋二 (1996). ほめことばの日・英語比較 日本語学 15-5 pp.33-42 明治書院

寺尾留美 (1996). ほめ言葉への返答スタイル 日本語学 15-5 pp.81-88 明治書院

山路奈保子 (2006). 日本語の「ほめ」についての一考察—「ほめ」を攻撃的に作用させる要因の分析— 日本語教育 130 pp.100-109

梁興宇 (2010). 言語行為「ほめ」に対する返答の社会言語学的考察—日本語話者と中国語話者の例— 国際文化研究 16 pp.83-96

横田淳子 (1986). ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移 日本語教育 58 pp.203-223

渡部倫子 (2005). プラス評価・マイナス評価されやすい発話の要素とは—日本語学習者に対する日本語母語話者の評価 教育学研究ジャーナル 1 pp.77-81